

## 高齢者像について

### 人口、世帯数 ( 1頁～ 7頁)

- ・ 2015年には戦争を経験していない世代が多数高齢者として参入する
- ・ 高齢者のいる世帯は2000年において約1/3、子供との同居率は低下傾向
- ・ 高齢単独世帯数の伸び率は埼玉、千葉といった都市部で特に高い

### 心身の状態等 ( 8頁～12頁)

- ・ 一人で多くの疾患を持ち、男女、年齢、環境といった個人差が大きい
- ・ ターミナルケアに関しては医療機関における死亡割合が高く、施設での死亡は少ない

### 経済状況 (13頁～22頁)

- ・ サラリーマンOBの増加により、年金額を上乗せされた者が増加する
- ・ 現在の高齢者の所得は世帯人員一人あたりでは全世帯平均とあまり変わらない。ただし、男女差が大きく、男性でも前期と後期の差が大きい
- ・ 現在の高齢者は貯蓄、資産および住宅に関しては平均以上である。

### 意識、社会とのかかわり (23頁～35頁)

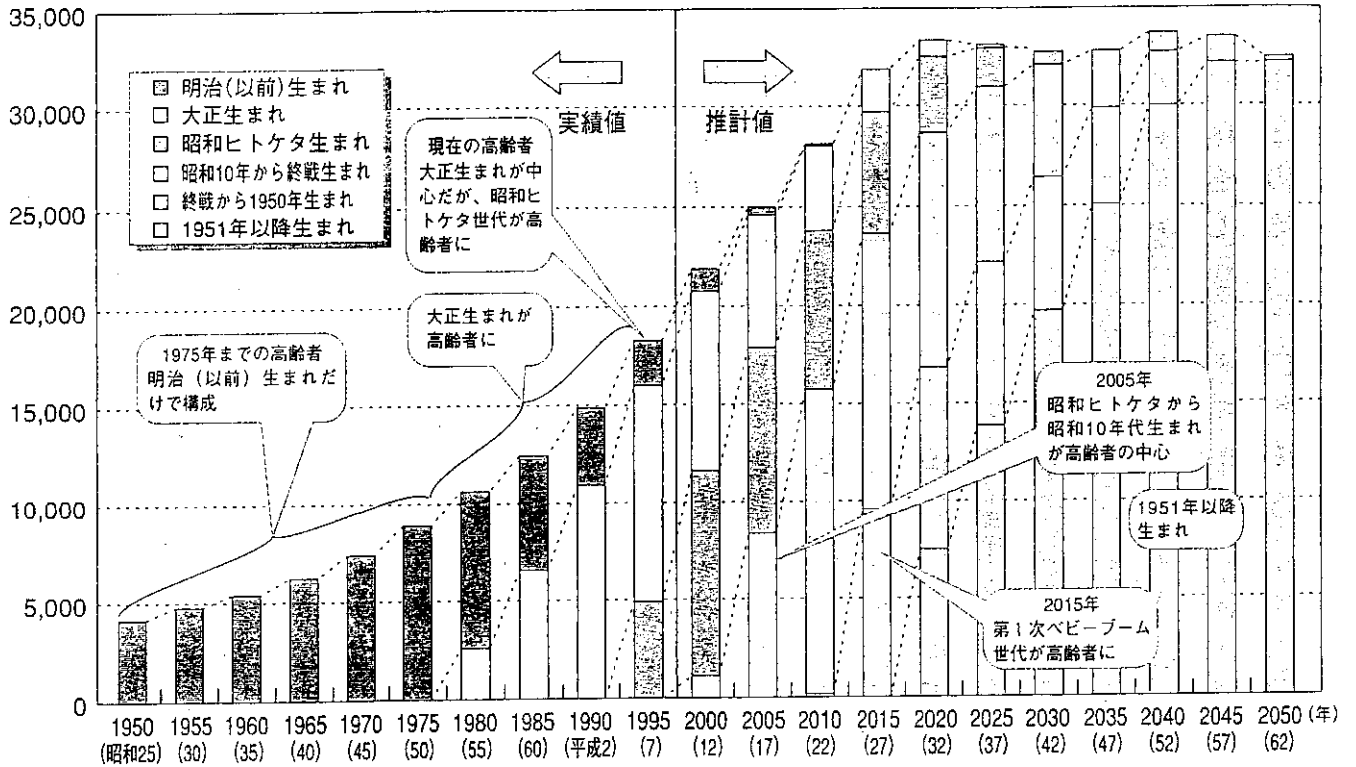
- ・ 子供との付き合い方は「いつも一緒」から「ときどき会う」に変化
- ・ フィットネス、みだしなみへの関心も強い
- ・ 近所の人たちとの交流や親しい友人の有無をみると、男性は少ない
- ・ 「団塊の世代」については「仕事より家庭が大事」と考え、食生活には「手抜き志向」と「手間志向」が共存し、デジタル化が浸透するなど、上の世代からの変化が大きい

### 家族形態 その他 (36頁～47頁)

- ・ 現在の介護者は嫁、妻、娘である
- ・ 女性の未婚率は上昇しつつあり、さらに「結婚しなくても豊かで満足のいく生活ができる」と考える女性が若い世代で多い

## 世代別に見た高齢者人口の推移 (1950～2050年)

高齢者人口 (千人)



資料：1995年までは総務庁統計局「国勢調査」、2000年以降は国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口 (平成9年1月推計)」

### これからの高齢世代

現在65歳以上の者は、大正時代から昭和ヒトケタ時代 (1934年以前) に生まれた世代が多くを占めているが、今後はこれまでと異なる世代が高齢世代となる。

これからの20年間、昭和10年代に生まれた世代や、さらに戦後のベビーブームの時代に生まれた世代が高齢期を迎える。これは人口規模の非常に大きな世代が高齢期を迎えることを意味することはもちろん、これまでの高齢者とは違って、戦争を経験しておらず、青年期には既に高度経済成長期に入っていたことなど、その時代や文化的背景の中で異なる価値観と行動様式をもつ世代が高齢世代になることも意味する。

その人口規模ともあいまって、現在とは異なる個性ある多様な高齢者が多く現れるものと予想される。

資料：厚生白書(平成12年版)

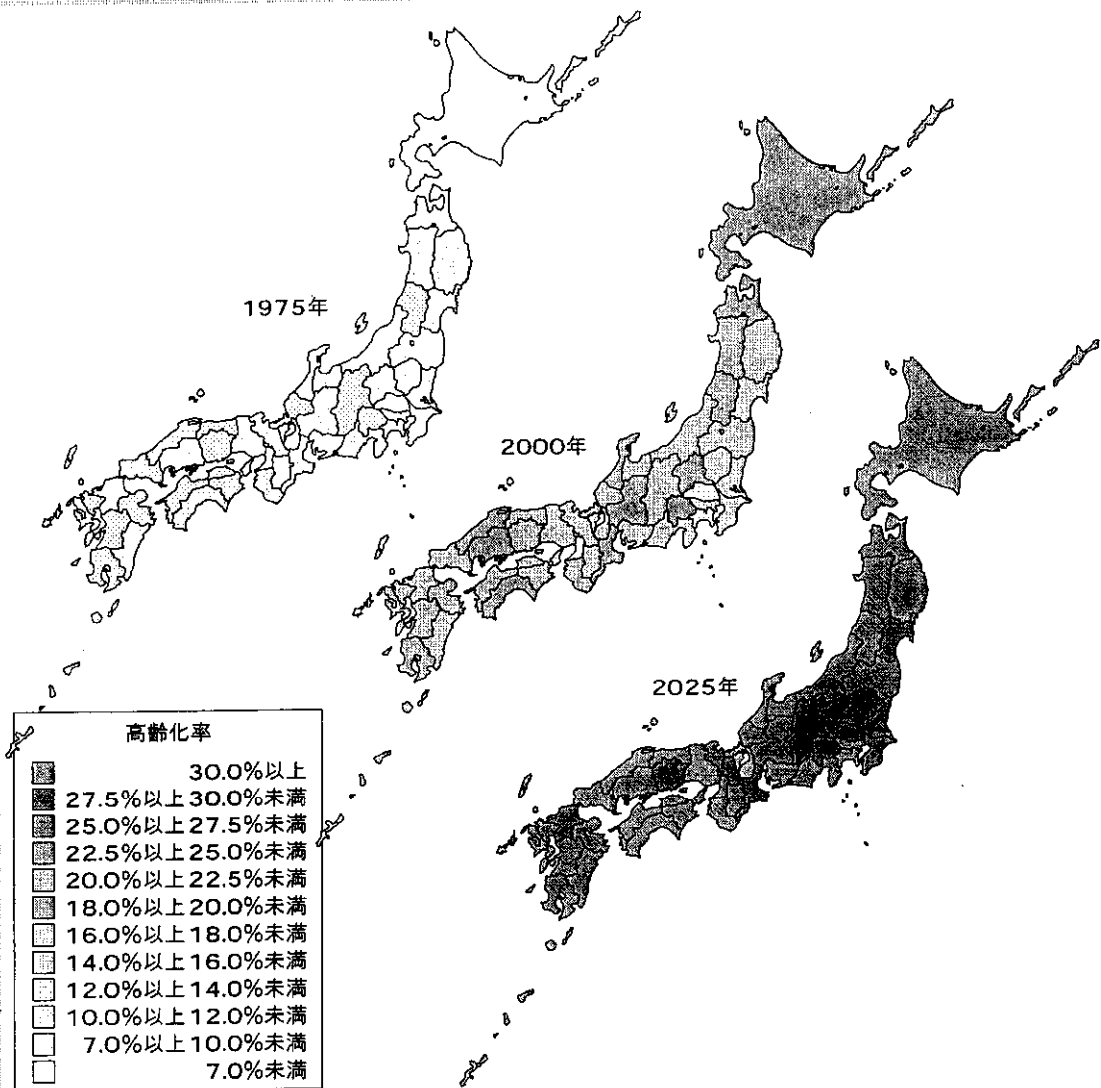
## 地域別にみた高齢化

都道府県別の高齢化率について大まかな傾向をみると、東京、大阪、愛知を中心とした三大都市圏で低く、それ以外の地域で高い。平成12(2000)年現在の高齢化率は、最も高い島根県で24.8%、最も低い埼玉県で12.8%となっている。

今後、高齢化率は、すべての都道府県で上昇し、

平成37(2025)年には、最も高い秋田県で33.8%、最も低い滋賀県でも22.8%に達すると見込まれている。高齢化率の地域性は現在と大きく変わらないが、三大都市圏、特に首都圏で高齢化がより速く進むことが見込まれている

都道府県別高齢化率の推移



資料：1975年、2000年は総務省「国勢調査」、2025年は国立社会保障・人口問題研究所「都道府県の将来推計人口(平成14年3月推計)」

平成12(2000)年においては65歳以上の者のいる世帯数は全世帯(4,555万世帯)の約1/3を占めている。

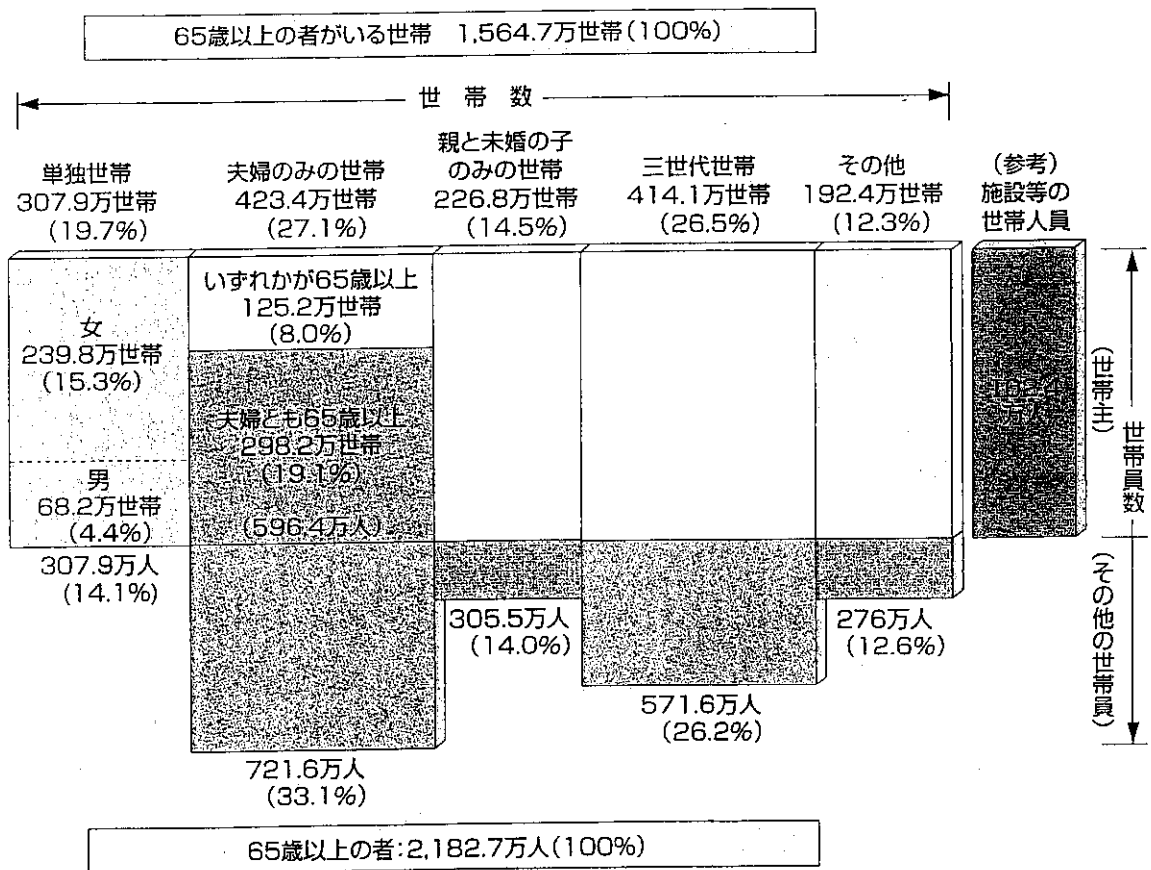
### 高齢者のいる世帯

高齢者のいる世帯についてみると、平成12(2000)年現在、65歳以上の者のいる世帯数は1,565万世帯であり、全世帯(4,555万世帯)の34.4%を占めている。

65歳以上の者のいる世帯の内訳は、「単独世帯」

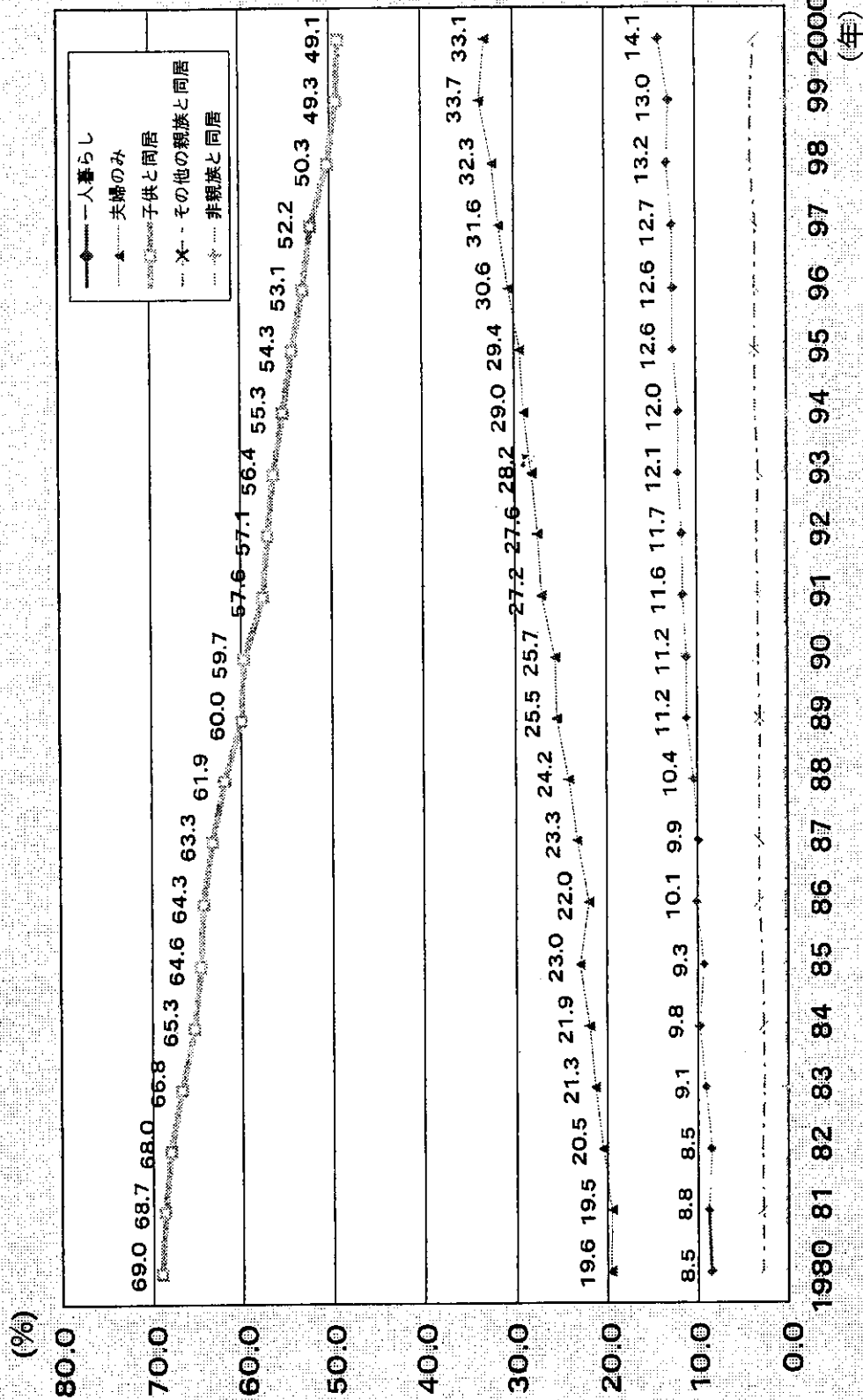
が308万世帯(19.7%)、「夫婦のみの世帯」が423万世帯(27.1%)、「親と未婚の子のみの世帯」が227万世帯(14.5%)、「三世代世帯」が414万世帯(26.5%)であり、三世代世帯の割合が低下し、単独世帯及び夫婦のみの世帯の割合が大きくなってきている

## 高齢者(65歳以上の者)のいる世帯と高齢者人口



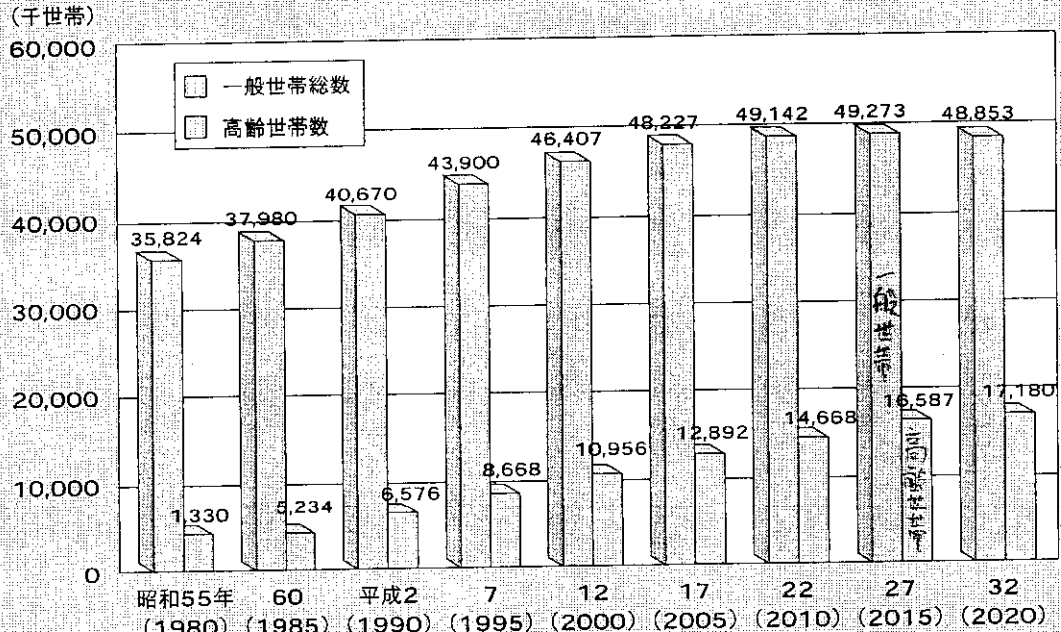
資料: 厚生労働省「国民生活基礎調査」(平成12年)  
 (注) 施設等世帯の世帯人員は、総務省「国勢調査」(平成12年)

# 家族形態別に見た高齢者の割合



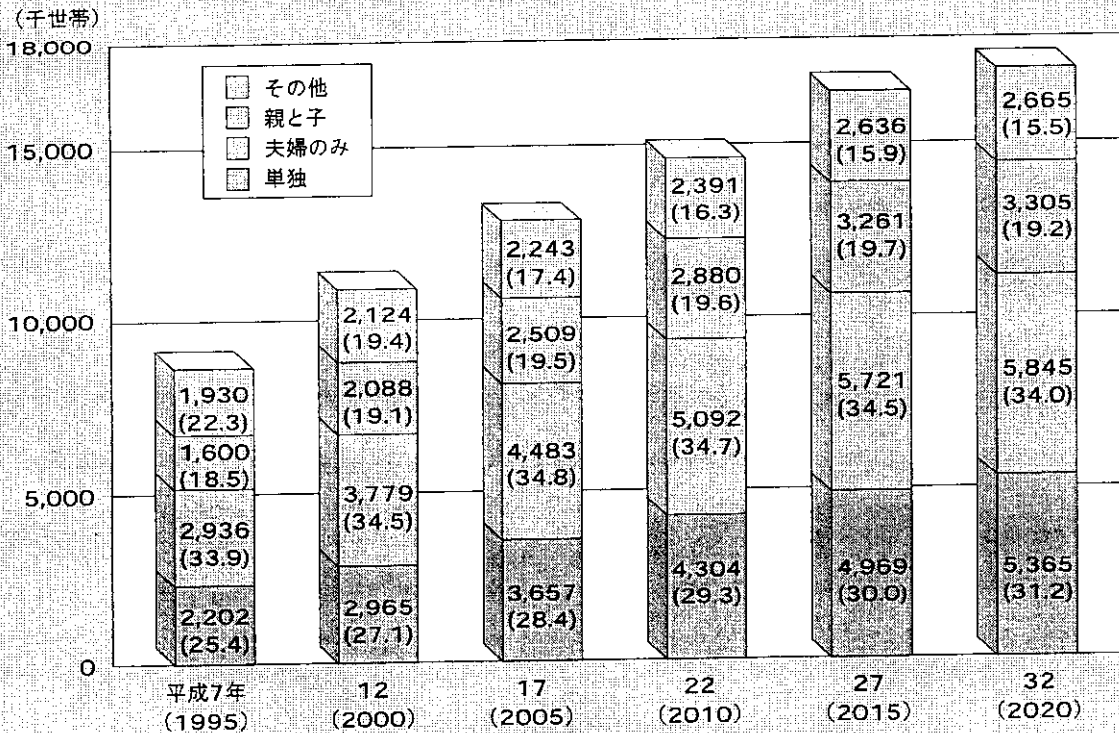
資料:1985年以前は厚生省「厚生行政基礎調査」、1986年以降は厚生労働省「国民生活基礎調査」  
 (注)1995年は兵庫県の数値を除いたものである。

## 一般世帯総数、高齢世帯数の推移

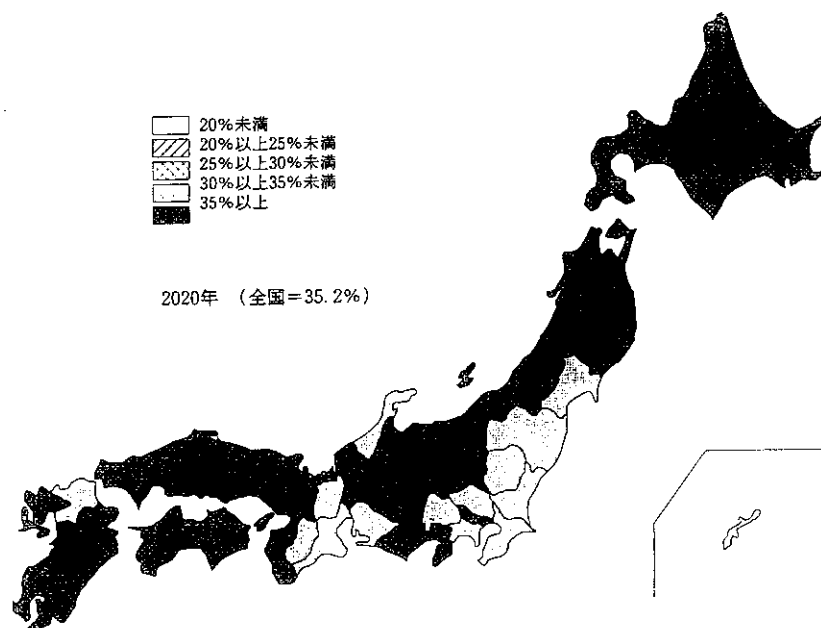
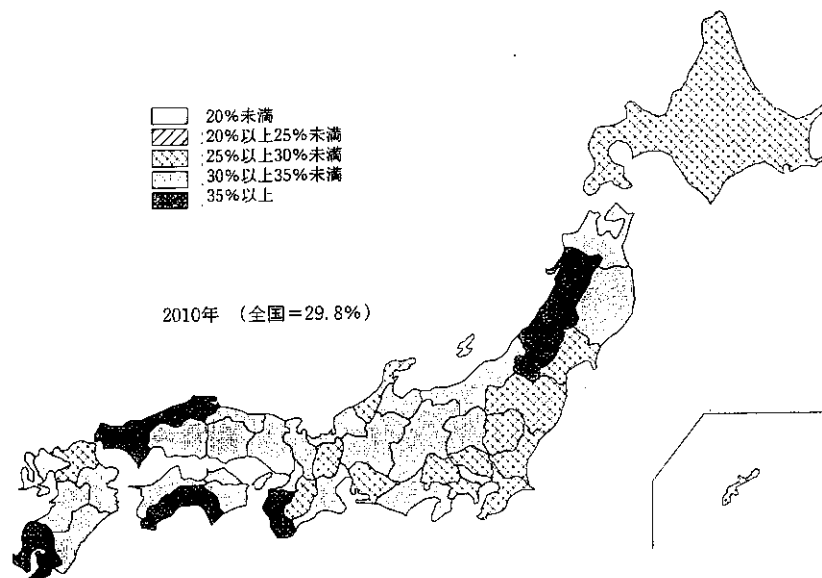
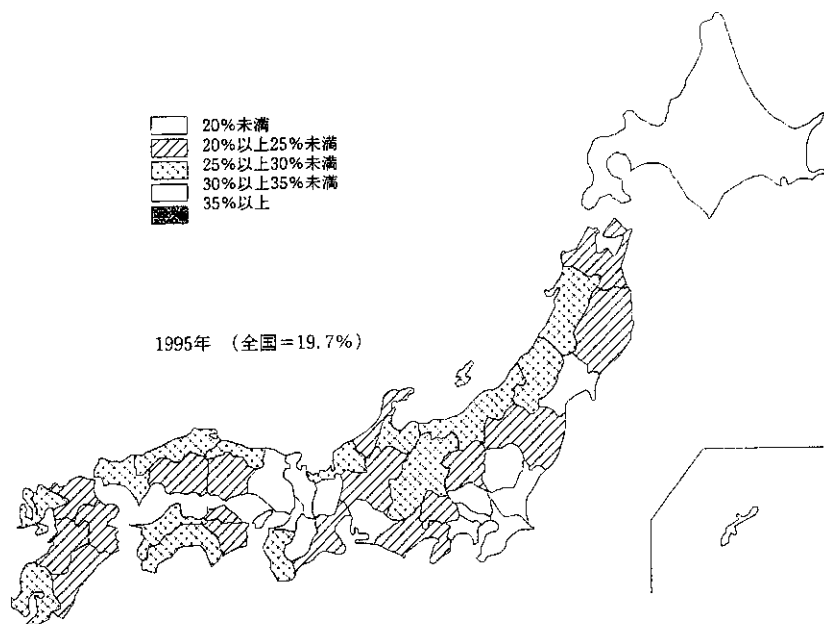


資料: 国立社会保障・人口問題研究所「日本の世帯数の将来推計」(平成10年10月推計)  
 (注) 高齢世帯とは、世帯主の年齢が65歳以上の一般世帯

## 高齢世帯の家族類型別の将来推計



資料: 国立社会保障・人口問題研究所「日本の世帯数の将来推計」(平成10年10月推計)  
 (注1) 高齢世帯とは、世帯主の年齢が65歳以上の一般世帯  
 (注2) ( )内の数字は、高齢世帯総数に占める割合(%)



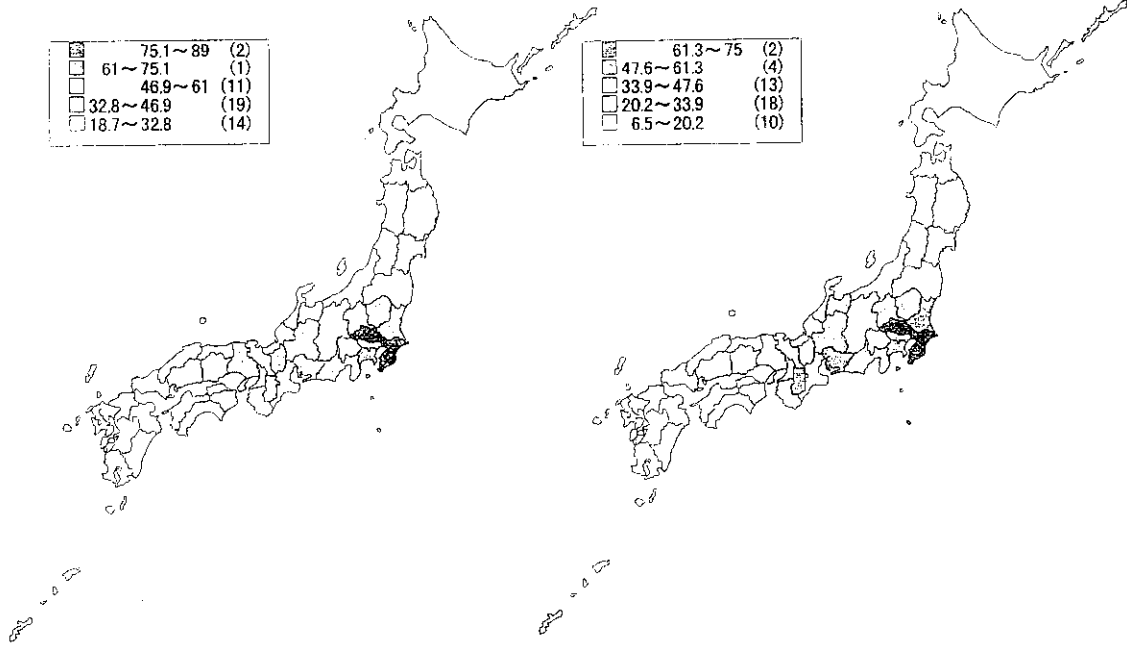
都道府県別 高齢世帯割合の推移

高齢世帯(単独)伸び率(2000→2010)

高齢世帯(単独)伸び率(2005→2015)

|           |      |
|-----------|------|
| 75.1~89   | (2)  |
| 61~75.1   | (1)  |
| 46.9~61   | (11) |
| 32.8~46.9 | (19) |
| 18.7~32.8 | (14) |

|           |      |
|-----------|------|
| 61.3~75   | (2)  |
| 47.6~61.3 | (4)  |
| 33.9~47.6 | (13) |
| 20.2~33.9 | (18) |
| 6.5~20.2  | (10) |

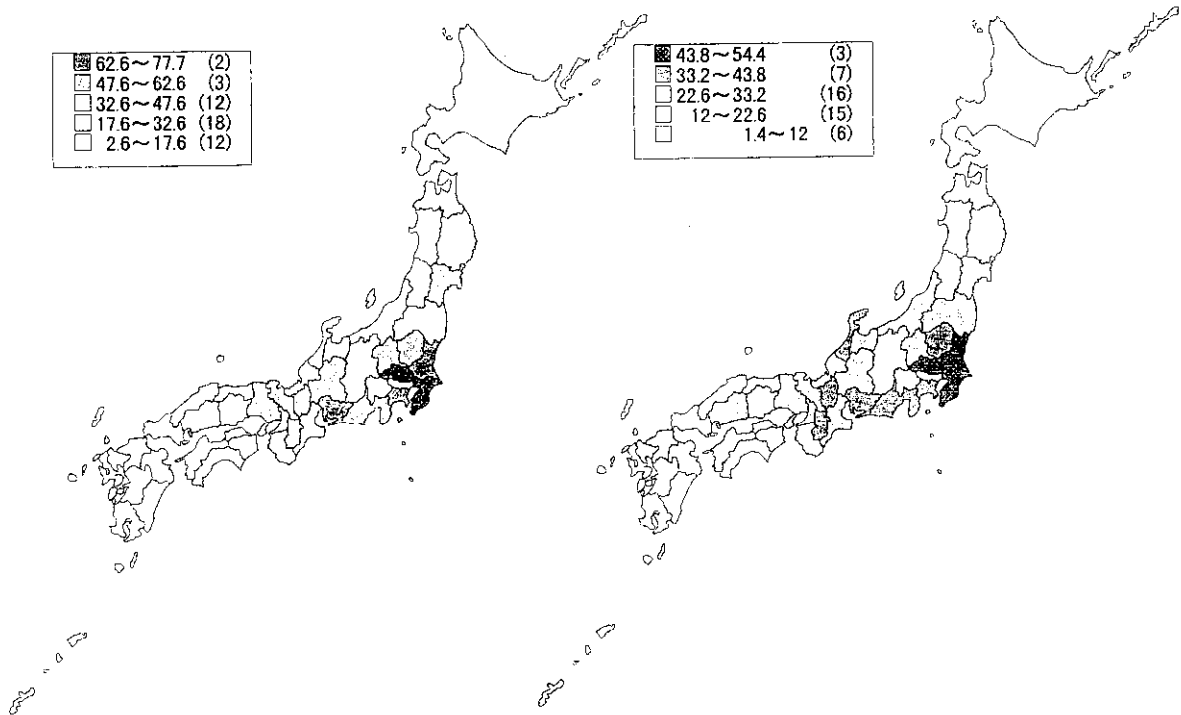


高齢世帯(夫婦のみ)伸び率(2000→2010)

高齢世帯(夫婦のみ)伸び率(2005→2015)

|           |      |
|-----------|------|
| 62.6~77.7 | (2)  |
| 47.6~62.6 | (3)  |
| 32.6~47.6 | (12) |
| 17.6~32.6 | (18) |
| 2.6~17.6  | (12) |

|           |      |
|-----------|------|
| 43.8~54.4 | (3)  |
| 33.2~43.8 | (7)  |
| 22.6~33.2 | (16) |
| 12~22.6   | (15) |
| 1.4~12    | (6)  |





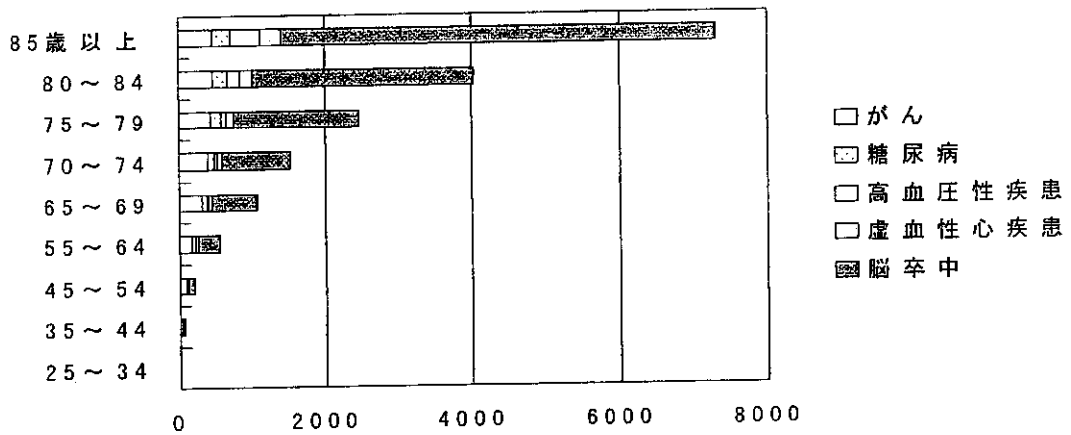
## 高齢者の心身の状態等の特徴

(1) 一人で多くの疾患を持っている

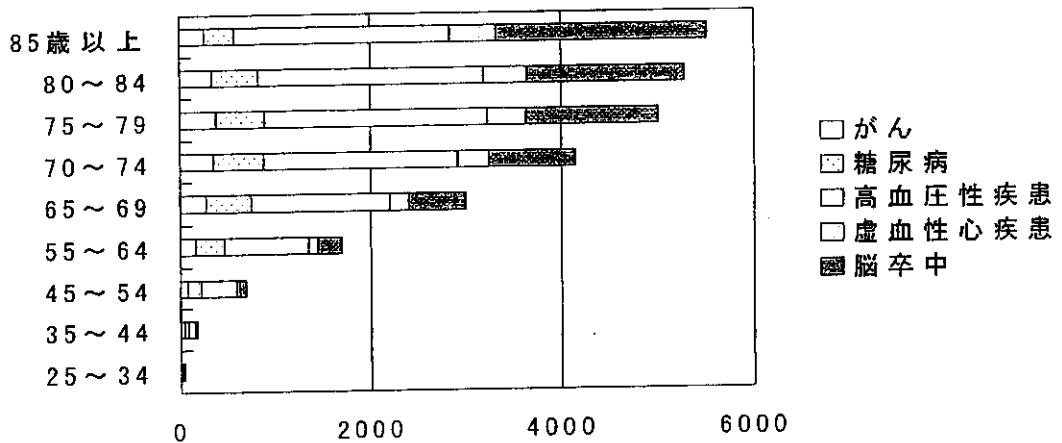
年齢とともに一人で有する疾患の数が増える傾向がある。

### ○年齢階級別主要疾患受療率

#### ○入院（人口10万対）



#### ○外来（人口10万対）



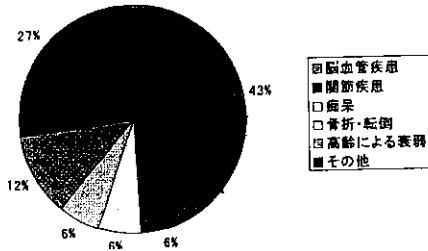
(厚生労働省「患者調査」平成11年)

(2) 個人差が大きい

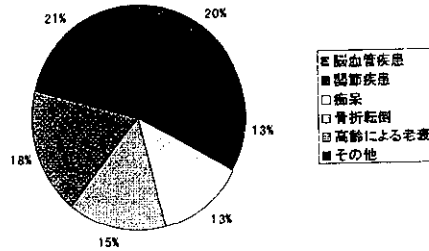
① 性別による差

介護の必要となった原因は、男性では脳血管疾患が多いが、女性では骨折、関節疾患、痴呆など様々な原因による。

介護が必要となった原因(男)



介護が必要となった原因(女)



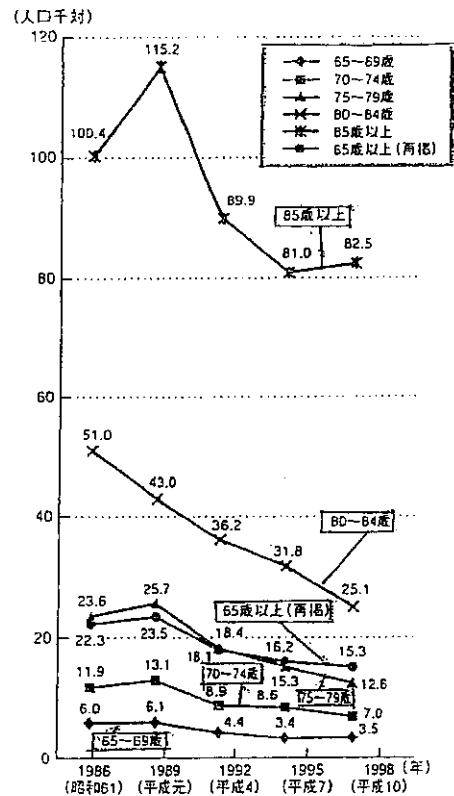
厚生労働省「平成13年 国民生活基礎調査」

② 年齢による差

国際的にも65歳以上を高齢者としているが、年齢による差が著しいことから以下のように分類している。

- ・ 65～74歳 (young old)
- ・ 75～84歳 (old old)
- ・ 85歳以上 (oldest old)

在宅の年齢階層別寝たきり者の推移



資料：厚生省大臣官房統計情報部「国民生活基礎調査」

③ 置かれている環境による差

高齢者は、居宅などの環境の違いに応じたケアが必要となることが多い。

例) 高齢者介護におけるハイリスク・グループ (下線は環境要因)

- ・ 85歳以上の老人
- ・ 一人暮らしの老人
- ・ 痴呆のある老人
- ・ 死別して間もない老人
- ・ 多種類の薬剤で治療を受けている老人
- ・ 病院から退院して間もない老人

(Integrating Care for Older People,

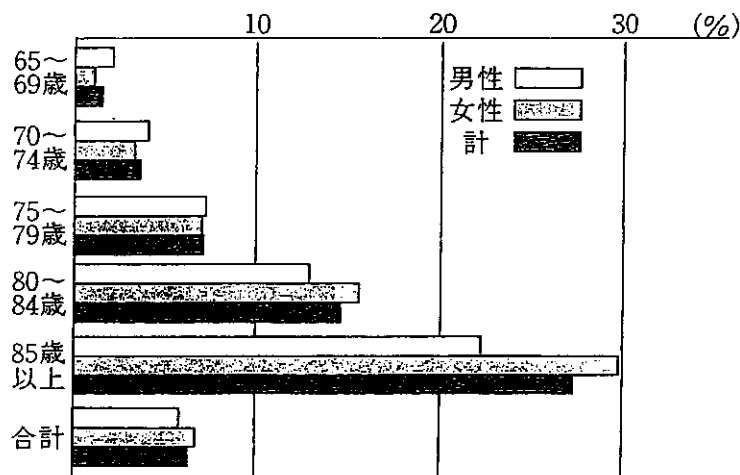
New Care for Old-A Systemic Approach 2002より)

(3) 老年病の発生頻度が高い

一般に老年病とは高齢者に多発し比較的特有な疾患(アルツハイマー型老年期痴呆、骨粗鬆症、白内障等)と定義されており、高齢者で多く認められる。

① 痴呆

1985年の性別・年齢階層別痴呆性老人出現率  
(在宅及び病院・施設内の合計)



(大塚俊男、1990)